

838
2
35

開卷百笑

097909-001-6

838-35

開卷百笑 一名，無事志有意

立川 焉馬 / 編

上

〔刊年不明〕

DBT-0069



談洲樓馬馬大人評

開卷百笑

一名無事志有意

浪岸信輔氏寄贈

開卷看笑卷之上

立川談洲樓馬馬撰

若水

談洲樓作

春暉やうくあけなすのゆへにまじしうらやま
たづねのまじ細くたぢびきたるはさなのかれしもむんた
てぬれぬをえとけつれなく入くもかれより曉ぐん麻く
と賣き小妻後居のひとりものも目をまほしのあひ及んと
も桶さびて井戸をさふいれどくもなきそ納瓶ながくあを
あびて居るものさだかに梅花のうら春花のうらま



だるいもどしたまふもたなほほろろとくもあかきけりとの位
 ぶつて今とてかきまづい水をあひらき春の春もつばた
 一草中風まひかぬ(も)もあびぬもあひぬもあびぬもあひぬもあ
 ちうたたまぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあ
 ちけて来てかきまづい水をあひらき春の春もつばた
 おもむもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあ
 清のけけたのあかきもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあ
 長生の女房三人かきまづい水をあひらき春の春もつばた
 たのんてあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあひぬもあ

手桶をさげていりてあまをたふさふたふさふたといふ
 を見てもいりていりてあまをたふさふたふさふたといふ
 いりてあまをたふさふたふさふたといふ
 いりてあまをたふさふたふさふたといふ
 井戸をのぞいてあまをたふさふたふさふたといふ

春興 神話

松友亭

是細作

冬びも大黒初卯系まよりあまをたふさふたふさふたといふ
 小行壽老人の福祿壽三人かきまづい水をあひらき春の春もつばた
 いりてあまをたふさふたふさふたといふ

て面白くしてござんさうなう。御殿を以て飛井のよき入あがら
 めししく観のまじり物やうきやうきなものをあそびてあつて
 ちよと目たわしきものしてござんてあつてあつたのたに
 ひねりかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたか
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 のみまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 めししく観のまじり物やうきやうきなものをあそびてあつて

ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 のみまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 めししく観のまじり物やうきやうきなものをあそびてあつて
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 のみまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 めししく観のまじり物やうきやうきなものをあそびてあつて
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 のみまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 ちよとまじりなまじりなまじりなまじりなまじりなまじりな
 めししく観のまじり物やうきやうきなものをあそびてあつて

本はかりの松をけ其方目利を以て是はどの役者といふ事をさう
 とや極したの作が、一まの馬ださもあるをさくまうて、おれは
 名じの草市に合馬をさくまうて、役の業を高く
 頭を白黒に其人のうまい事もさうだ。さういふは、いふへい筋
 太く、さのねのきんばは、物事をいふ、さるをいふ、さるは
 まうとす、指さすあつらう、さる、さる、さる、さる、さる、
 舞能も、見、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 隈町は、居、二十年程あつて、さる、役者といふ、面、さる、
 木戸番でも、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、

いて、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 さい居風呂を焚くおまはさる、

蓮牡丹

緑青人作

今、昔本所様江の寺にあつて、蓮の花が咲、其花形がたんの花
 さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 心も、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 り、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 さい、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
 さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、さる、



たみのうしおにまたもたふきつてわたりかゝりてはしむるはしむるあしむる
ほどたゞふきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
あまほしたつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
をうんと女中が来てはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
ますせめて其跡まうと。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
し取次と成て下りませと。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たぐい只川辺でたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
ていれど見物がらうと。面倒だう見せる事と。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
しおん。血通をたふしと。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて

あつ外にたふしと。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
いそいだつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たへ違ひ見物がらうと。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たつたつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
ほしたつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
あひま徒見と。たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たまふつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて
たきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつてはたきつて

ましと見せしむと右の次方ををまきばおせしきりて
 新^{あらた}なる言^{ことば}ありたる様^{よう}にぞつまず其^{その}よし後^{のち}家^{いへ}より後^{のち}
 家^{いへ}へはまはらへしとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 花^{はな}道^{みち}もたむとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 子^こがめんが後の富^{とみ}貴^きなるもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 のよとりの影^{かげ}へたりとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 柳^{やなぎ}子^こ鼻^{はな}

直^な辰^{ちん}

金^{かね}銀^{ぎん}舎^{しゃ}
作^{つく}朱^{しゆ}他^た

丑^{うし}六^{ろく}人^{にん}連^{れん}かして汝^{なんぢ}川^{がは}採^とひかまを硯^{えん}蓋^{がい}がもつと見^みゆれくは小
 ぶねのまゝ九^く年^{ねん}が蒲^ふ降^か黒^{くろ}い物^{もの}をくはのるまのつからむ
 してくもむとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 ましと見せしむと右の次方ををまきばおせしきりて
 かまよりの言^{ことば}ありたる様^{よう}にぞつまず其^{その}よし後^{のち}
 家^{いへ}へはまはらへしとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 子^こがめんが後の富^{とみ}貴^きなるもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 のよとりの影^{かげ}へたりとていふもよとりの中^{なか}に庭^{にわ}の影^{かげ}へたりと
 柳^{やなぎ}子^こ鼻^{はな}

まゝかたむかひにばいばいお女かひのりまふくもあまし何れもまふく
まゝかたむかひにばいばいお女かひのりまふくもあまし何れもまふく
まゝかたむかひにばいばいお女かひのりまふくもあまし何れもまふく
まゝかたむかひにばいばいお女かひのりまふくもあまし何れもまふく

きん酒

妻佳翁作

西國の駒止橋のちたし人此へあるまふくは六三河を大考合
つておちまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
おれはまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
でき講がらひていなんまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく

こらにちのがたいまふく長者三人連の外の宿むじもものこらに
おれはまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
まゝかたむかひにばいばいお女かひのりまふくもあまし何れもまふく
けんをせうてまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
るがあるおれはまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
時におちまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
いなんまふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく

大鼓

和親其 丹盛作

ちの地まふくもあまし何れもまふくもあまし何れもまふく
晩けにこせを長考の者若流

言よまゝいんれ大はぶみの音ぞ盤木うとどんで後が後くまの
大風の吹時をどい世を雨にまきれていすれと怒りゆ世をを
いひのりともる事とくよませるもの住の老が来て若且那
けいひるせはみをおちあやれませぬぞれは波ぶみの音が火算の
なん本のまにまらぐかろ止てくれろと大屋のいのみまで何れぞ
さよもさいといひばぞれはまたが住格うこぞりやせとりか板はみ
を後い書て小カをとりてちのぬくから夫の何ふまるといふ
果は家根の火は目へつづみのまといれけむさる

けいひる所

十林真
萬善作

今むじ娘のけいひる年比四十五の末のま代何かせをきて
る時くつまもやれい誰もけいひるまも昔もたふかた
あやうい女も娘のいんいん中いんあつひもあやうい
娘のまだあやうい母のまをいんいんいんいんいんいんいん
けいひるいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
くりてきていんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
の上れ事後れをきて居るものあの子を相違ひあやうい
たうかりあやうい娘のまといんいんいんいんいんいんいん

移すまへにききかたはたかきくまらたくとあふりふり
おののちりまていひたのたごいあひけりまをゆるのあま
るのでもさうおきよきからあまをさうり相渡さか
らいひを接かすコトきうがよるあまをたごいひの
五十西の支度合いさか

蛇

義知丸作

是も今もむに陽田に思摘草に行くと下女のまへへ入
蛇がまはひ大らんを入るに戸入医者をも呼あやうやくさ
やのちり者まかひきまきひあまのまきり地今あて行ま

ちへいひのうらむていぢけたあへくこいひまみちう
あつこいひのまをまて居るといづら者まにちりひ目
ままてとまていひあまを借授してふれると且取今
大さうりたかおもへいよままきり女中のまうをい
ハ女中の教をこあひ漁魚がうじたがうが赤い

アちりた者

妻相二章 金持作

今いもむじかまにせいをじて芝居を二交見の事もま
ういなるをの疎のあるうつた合もせば夜から夜まで
まのちりあひのちりまにまらあひあひあひあひあひ

まよて行々りに文だちがらんまり各いかにきふらしてあつたを吉原へ
 てして。おのれをせやあつていらいあつてと相談して。この徳作の
 十にあらまよ。吉原をふりまふ事あるまよ。せめてらんおれだもあゆみ
 浅き人出ぬものあつて。おのれと連立大門をいひと女席の道中。いられ
 女席のサモケ見せつてと格子先へついで行つてせぬ。いらい
 一むんまよあまの。いらいの。武原だつてをいひせぬ。いらいの。酒
 肴に本膳めをさつて。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 女席を抱て。いらいの。武原。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 丹へくつて。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。

大屋

日盛様 築園作

おまの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 まよ。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 考つて。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 の。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 三。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。
 大屋。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。いらいの。

湯

奥久作

のる夏夜歌に行り折か子僧出り且歌ぬぬも夜食をちりる
とてまきとらあつしむもあつらひらたもあつかがふらふらと
々々あつしふらふらとあつらひらたもあつかがふらふらと

○地口好

三樂作

今ハむじ地口母の付込え京腹合はて居る又地口地口好
てをやんまそりあつしとてあつらひらたもあつかがふらふらと
おれも地口好はたたとあつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
ちねがしあつしとあつらひらたもあつかがふらふらと

あつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
焼耐くがんがまのあつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
あつかがふらふらとあつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
三列のあつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
あつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
あつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
あつしとあつらひらたもあつかがふらふらと
あつしとあつらひらたもあつかがふらふらと

はたぬ

何見其作

是も今昔泳川他山がやらの女前やふれ客三人座半行の唐紙

とまじらふたんの御中者の人だれ松杉の木末或は萩の地を海客に
 派子不丹を持出すお藤さんお梅さんお孫さんお孫さんお孫さん
 りんだ所さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 お用いさんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 ぼんぼんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 おいとお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 してんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん
 さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さんお孫さん

こや一番れ教尺たのびおんおんおんおんおんおんおんおんおん
 あり其ふたをいんてきておんおんおんおんおんおんおんおん
 帰りのおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
 したおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

名酒屋

橋作

今昔源川名酒やらいふ多かぐでたおまづ女席の紙の書
 もめんやの梅とりおんおんおんおんおんおんおんおんおん
 りたより潤田川おんおんおんおんおんおんおんおんおん
 ずるとおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

いもの影川はどいどい世にあり申た

みぢり

反哺作

今年にまづのにわがやうな女を大報やあゝめうらむを
町の子無にきし二十人あつたらうらむをうらむを
雀もいのかしらも冬い物だ雀もい冬い雀もい
まのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
れまのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
唯子方梅は花をその目もまのせうを愛茶婦子に
拍子本をまのせうを愛茶婦子に

とむらりをスエ坊がまの月をのり何のまの月だお

女師の巻

千巻作

今昔言も入ぬ女師は愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
粟刈りくちあつたこまの子を引まのせうを愛茶婦子に
せうとすの天門まのせうを愛茶婦子に
まのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
まのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
まのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に
まのせうを愛茶婦子にまのせうを愛茶婦子に

たゞいなんもやがてい何のせん。ヨウスくしつても移るや中か
おまたをよんでぞいひてんや中かやめつとくかかじいお
めまふかちかちかちか

朱

始亭作

是も今もむじつきまやれ住居く形もて仙基朱の伸入ゆく
播州朱の方へ美濃系が娘おまを嫁にやじよがどく懐
胎してあ十月小虫まづき中へ朱のどくがよん後とまき
しち升取ががまてしこくちとむじつとい大門也此方登じと
呼儀をよみまがく通にくけよもちうぬるの腰乃のたりを三

三たはいなんの拍子に子米がある。とくい子米たるとんハ舞々

白眼龍

三七作

今昔にやあつこの命を催角かたどく東西に方こかれ土儀のを
わらみらひ笑たる者ハ肩と行更をよたぬるおんくにはちか
大関にや東大目玉く西ははめ教くと双方立向ひあつ
志ましく勝負つるぬ水きのませそんよりひきあをつじてあ
めて居るとだんく目玉がいあつなるああ方は開えもよん
目をどろろやまそれハ見物うらこまのいかなる松エび

屏糸術

青奴作

二人は此の長巻を手にし、師匠の如く其の長巻の如く、
 事あるもあらずも、移習にゆく事、たの人の中、事として、
 立出らるるから、師匠の者で、其の事、
 下りて、せ、下地でも、
 して、
 まつ、
 是、
 又、
 中、

おもて、
 あつ、

玉の巻

玄出真 豊樂作

今、
 つい、
 珠、
 者、
 引、
 さ、

きしてゐる。おつが事。三年は。其。信。の。さ。な。と。
き。ひ。つ。な。が。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
こ。ち。へ。事。の。と。り。に。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
京。人。形。共。に。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
酒。で。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。

釣り好

世幸廣九作

深川の米場の辺へ。い。つ。と。い。つ。と。い。つ。と。い。つ。と。い。つ。と。
男。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。

一。た。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
く。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
ま。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
い。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。

虎

馬車 百馬作

和。友。内。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
東。店。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。
を。愛。正。札。付。の。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。あ。ら。う。と。

しま光がかりの血もあふかの人と床の女
 のはるあつてんやんおのぼりなまへて口をばらちあはる代
 のうはちとく何さういふかめてまへんは是ういふまてえん
 さう一交たかりくくぬみだ新造元とちうてこちうちあはる
 のうはちとくいふまてくえんまへんは是ういふまてえん
 うま農ハ一皮ちうてんかじり入まてくままをうのりて入
 ひびりちのあまとりまへんは是ういふまてえん
 してらなと引止九眼の下指をおもてて

葛略の巻

中尾真 素的作

孫の外志とゆあつ夜出にまへてかく葛略の才にていふる
 がうりま事系ぞいしものいして夏のうちいふすていもま
 飯のさいよハテ物よも教いんをとりてよくかたていんば
 中へ今喰まを片スア一日おぼすくよんはあがらく血指めん
 ちかよんまあしんぬちまきよもくろくよまますちうてくを
 つまかんまもぞれうりついでていなるどころうせうつて
 老れまますねあ妙ほまきくいであれまますま
 本舞橋 要賀作

十露盤

コレサハ十五のものが行燈をさると眼るう難く練習をとおわれ

大寺の訊

四角堂

治呂菴作

今昔妓女二人、ついでに姉の奥子と妹の婿の娘と、あつた
 くといふと、その外、湖東節の新文句の唄を、かいて
 りの内へ、くると元落して、あまのなるを、母のつらね、とも
 しか、すげ、夜夜、夜夜、夜夜、夜夜、夜夜、夜夜、夜夜、夜夜、
 の多と、ころ、実の娘を、嫁、つらね、あまの、あまの、あまの、
 とうる、油、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、
 いる、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、
 娘、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、

欠落をさるるま

星

鳥真

龍馬作

是も今、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、
 あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、
 まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、
 南、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、
 移、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、
 まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、まじ、
 こい、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、あまの、

うき面の何をたし聞たり井テ虫のまじのうらみ梅ぼり三巴
の侍の天星又やせしけりあごで蠅を匿するあの星は何と
とすたつらぬいづるたの

化物

琴多樓 鹿兒善作

百物語のいほも有らん化物大勢のまじ中にもいへし入る
づれもあまのいづく秘術をたしてまはさしつるも尚時れ
歌舞妓役者るるといふるものいあるは岩井半四郎などい人
して七化をまじはし是はうそであらふものといふれく一ツ眼と河童
の其世居るといふと猫まじはしつるものも又次つらるる長谷川

核へ入形所といふを行と虎やといふ言葉子やの蒸籠電うんぞる角
か右をうんとと芝居の者板つらやだやうもすが銅猫のあが
まねらつてくはくはくあるものいあるはあまのたつたつて
くまらつてくはくはくあるものいあるはあまのたつたつて
の下で結ひもいへらぬいぬる中村やの薪の本戸をえらつてあ
たり芝居者るがうかあつたつたといふは代もあまのたつたつて

ふじか

五明作

年よすれいふひのやの像柱言忠臣蔵のうらみとていふいふ
はる中にあまの腕伯老いふてあまの腕の役せうのうらみ

838
2
35

澤りてどく方丈堂も。澤をいひおのまひけくしぬ
 りぬぢもきふくひびくゝ用室にたてし。澤本
 につゆひふぢ。澤をいひおのまひけくしぬ
 ついてだごんてなごん。澤の腹口へおのまひけくしぬ
 巻のふし。澤をいひおのまひけくしぬ。

